

【中学生の部】鹿児島県知事表彰

「想定外」を想定する

鹿児島市立紫原中学校 3年 たくみ かな 内匠 葉捺

「想定外」

何度この言葉を聞いただろう。大きな災害が起こる度に耳にする「想定外」。その度に多くの命が失われている。

平成三十年七月、西日本豪雨は、広島、岡山県を中心に河川の氾濫や洪水、土砂災害により二百人を超える死者を出した。平成以降最悪の豪雨災害であった。

気象庁は、前代未聞の規模で大雨特別警報を発表し、最大級の警戒を呼び掛けていた。それにもかかわらず、なぜこのような最悪な結果を生み出してしまったのだろうか。

土砂災害により多くの犠牲者を出した広島県では、避難指示を受け市指定の避難所に逃げた人の割合（避難率）が、対象となった百十一小学校区全体でわずか三・四％。四年前に広島土砂災害で被災した七小学校区でも最大で十三・三％だったそうだ。近所の人々が避難するように声を掛けても避難せず、被害に遭った人もいたそうだ。なぜなのだろうか。テレビで救助された人が口々に語ったこと。それは、

「自分の家は大丈夫だと思った。」

という言葉だ。

反対に家屋に被害がでて死傷者は出さなかった地区もある。それは、ハザードマップを参考に早期避難をした人、これまでの災害を教訓に地区全体で日頃から避難訓練や近所への声掛けを徹底していた地域である。実際、これまでにテレビで大雨洪水警報や土砂災害警報、避難準備情報が出たとき、私自身も避難しようと思ったことは一度もない。今回被害に遭った人と同じように、どこか他人事で自分は大丈夫だと思ってしまっている。これではいくら情報が速く伝わっても、行動に移す人がいなければ甚大な被害は免れきれないのではないだろうか。

私の祖父母の家は山の麓にある。九十六歳の曾祖父もいる。土砂災害はいつどこで起こるか分からない。ひとたび山が崩れれば、一瞬で家も人も全て飲み込まれる。広島土砂災害の映像を見て、もしこれが祖父母の家の裏山で起こったらと思うと、とても恐ろしくなった。そこで、母や祖母と避難の方法を話し合うために、鹿児島市が配布している『安心安全ガイドブック&防災マップ二〇一八』で住んでいる地域を確認することにした。祖父母の家は土砂災害警戒区域で急傾斜地の崩壊の危険があることが分かった。さらに、地図を見てみると、私の住んでいる地域は土砂災害警戒区域に囲まれていることが分かった。避難場所も山の麓の小学校だと思い込んでいたが、実際には、福祉館だということが分かった。しかし、この福祉館は決して大きくはない。本当に災害が起きたとき、避難所の役割を十分に果たせるのか疑問に思った。

これらを踏まえて災害が起きそうな時は高台にある叔母の家に避難することに決めた。曾祖父のことを一番に考えた。移動にどれくらいの時間がかかるのか。避難するにあたり何が必要か。いつどの段階で避難すべきか。考えなければいけないことはたくさんあった。

しかし、こういったことは日頃から考えておかなければ、実際に災害を目の前にして冷静な判断ができるとは思えない。今回、災害が起こることを想定して避難場所や避難方法を話し合ったが、これで十分なのだろうか。まだまだ不安は残る。

毎年のようにどこかで起こっている災害。いつ自分の身に起こるか分からない。災害は「想定外」に起こる。このことを想定して一人ひとりが行動に移し、自分の命は自分で守るという意識をもつことが、まずは必要だと思う。